

## ATR創立35年の温故知新

株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）は、1986年に基盤技術研究促進センター（KTC）からの出資を前提に株式会社として発足し、本年35周年を迎えることになりました。一般に民間企業ではできないような夢のある基礎的、先駆的研究を進める他に例を見ないユニークな民間の研究機関として研究活動を進めてきました。熊谷信昭大阪大学総長と長尾真京都大学教授の指導下でまとめたマスタープランには、臨場感通信、音声認識・翻訳・合成、光衛星間通信、ニューラルネットを使った画像認識が掲げられ、いずれも35年後の今日ようやく実用に供されるようになる基礎研究の名に恥じない、骨太のテーマでした。基礎研究機関としては、Business Week誌が、1997年のArtificial LifeやEvolutionary Programming分野で世界4位に評価しました。

KTCの支援が切れた後、これらの第1世代の研究テーマは順次情報通信機構NICTに継承されましたが、並行してERATOを使った第2世代の研究テーマが脳科学、ロボット、生命科学で立ち上がり、脳科学・AIや無線分野でCoEとして機能するようになって今日に至っています。

事業化に関して、2007年前後に、コンピュータの制約からGMM-HMM型音声認識と呼ばれる分野を限定したアプリでしたが、NTTdocomoやauの音声認識関連サービスの実現に貢献しました。ATRファンドによるATR発技術によるスタートアップ支援、さらには、けいはんなをグローバルなオープンイノベーション拠点にする試みに着手したのが近年の特徴です。

一見関係のない研究を行っているように見えるATRですが、事業の根幹は、通信だけでなく、脳内、体内、社会といったネットワークに潜むダイナミクスの研究開発にあります。大阪・関西万博には、サイバネティックアバターやサイボーグAIを標語に臨んでいます。万博後も睨み、ニューロフィードバックによる精神疾患診断・治療のXNef、アバターのAVITAといったATR由来の新しいスタートアップとの連携を加え、「けいはんなリサーチコンプレックス推進協議会」を活用した研究の社会実装を推進し、健康長寿社会の実現に貢献していきたいと考えます。